

シェイクスピアの「ヴィラン」

——その近代性について——

(1)

尾崎 春

コウルリズが「万人の心をもつ」と呼んだシェイクスピアの生み出した数ある人物の中で、最もきわ立って近代的な性格をもった一群の人物が「ヴィラン」として描かれているのは興味ぶかいことと云わねばならない。また、たとえ悪人ではないにしても、たとえば『むだ騒ぎ』のビアトリスや、『末よければ総てよし』の女主人公ヘリナの強烈な個人主義的傾向が、やはり悪として批判されていることも注目し得る。個人主義、合理主義、あるいは科学的な唯物主義といった近代精神は、本質的に、悪の精神なのであろうか？ それとも、善悪とは無関係な、アモラル(amoral)な精神なのであろうか？ あるものを善とし、悪とするためには、少なくとも、社会に共通した判断の基準、一つの道徳観ないし価値観がなければならぬ。シェイクスピアが個人主義を悪として斥けたとき、彼は、単に、中世以来の伝統的な世界観に従っただけのことだったのだろうか？ それとも、このようなアモラルな精神は、いわば目的（自由、平等あるいは人類の幸福といった目的）のための手段であって、それ自体、目的たり得ないものであり、ひとたび用い方をあやまれば悪に転ずる可能性をその中に見たからであらう

か？

たしかにシェイクスピアの時代には、中世以来の伝統的な世界観が、少なくとも公式的 (officially) には、厳然として存在していたことは周知の通りである。それは、上は神から下は無生物にいたるまで、整然たるヒエラルキーを構成する、それだけで完結した「秩序」をもったものであり、個々の存在は、神によって定められた固有の地位をまもり、それぞれの立場から、本来の義務を果すことによって、神の栄光をたたえるという共通の目的をもったものであった。このような世界にあって、自己を主張し、個人的な目的を追求することが、この上ない悪と見做されたであろうことは想像に難くない。

しかしながら、当時において、個人主義の最悪のものとされていた野心は、なにも近代になって始まった訳ではなく、また、マキアヴェッリによって明確な表現を与えられた政治理論も、彼以前から、無意識的に、あるいは表向きは否認されながらも、内々に、多くの人たちによって実践されるところであった。このような個人主義的な人物は、シェイクスピアにおいて、「ヴィラン」以外にも、いくらもいる。特に初期の歴史劇は、「秩序」の概念にもとづく王権の神聖と、それに関連する忠誠、服従、愛、良心といった中世的な価値をふみにじる、利己的、野心的な個人主義的貴族たちの、不実、残忍、不義といった悪が渦巻いて、さながら地獄絵図の観を呈している。シェイクスピアの一連の史劇は、このような状況にあって、近代的君主は如何にあるべきかの探究であったとも云えるであろう。

このような貴族たちは、しかしながら、一人を除いて、きわ立って近代的性格の持主であるとは云えない。何故なら、彼らは、あくまで伝統的な秩序の中にあり、近代的合理主義、功利主義を実践しながらも、少なくとも

表向きはこれを否認していたからである。これに対して、個人主義を、ということは、当時であつては、とりもなおさず「悪」を、公然と、己れの行動原理としてとり入れ、その実践を宣言する人物がいる。これがシェイクスピアの「ヴィラン」であり、際立つて近代的な性格を与えられているのもこのような人物なのである。彼らの悪に対するこの態度こそ、「ヴィラン」を他の悪人たちと区別する一つの大きな要素と云えるであろう。後者があくまで原因・結果の支配する道德律の世界の内に存在し、彼らの行動が悪そのものよりもその結果を目的とするのに対して、前者は本質的に道德律の外に立ち、彼らと彼らの行ふ悪との関係が、多分に、道德とは無関係なアモラルなものであるのも、右のような彼らの悪に対する態度、および彼らのとり入れた行動原理の性質によるものと云えようか。

けだしシェイクスピアが近代精神という新らしい葡萄酒をもるに、中世道德劇モラル・ドラマ以来の「ヴァイス」という古い、しかし人氣のあつた革袋をもつてしたことは興味深いことと云わねばならない。それは、悪巧みの名人（intriguer）として確立された「ヴァイス」の機能が、「ヴィラン」の内容をもるにふさわしい器であつたと同時に、「ヴィラン」の悪は、当時にあつては、「ヴァイス」（悪徳）という、それ自体アモラルな存在を通して以外、表現することが不可能であつたからかも知れない。

これと関連して注目されるのは、シェイクスピアの「ヴィラン」が、なんらかの意味で、社会の「アウトサイダー」だということである。「ヴィラン」の強烈な自意識と目的意識——己れのおかれた状況を客観的に分析し、それとの関連において他を、そして自己を分析することによって、自らの価値観と、そして行動の原理を確立する（これは、特に、後期の「ヴィラン」に著しい）強い自主性——は、ここに起因する。彼らが、彼らなりの立場からではあるが、伝統的な価値や既成の制度（establishment）を諷刺し、あるいは正面から批判、攻撃を加えること

を可能にしたのも、やはりこの故であった。順境にあって、自分の属する同質の社会、道徳観に、ぬくぬくと自己満足している限り、自意識の生じよう筈はない。いかなる社会にも、あるいは社会がどのように変化しようとも、どのようにでも適応する（そして「社会」はこれを要求するのだが）柔軟性をもった「健全な」俗物には、自意識など（そして真理も）、無縁のものである。この意味で、ハムレットの「佯狂」は、彼が見出した腐敗せる社会に適応できぬ彼の性格の高潔さ（integrity）の一つの現われとみることもできるであろう。それは、ハムレットの、「悪」の社会からの疎外の象徴であり、このように社会の外に立つことによって、社会に対する批判も、またその社会で当然のこととして受け入れられている価値に対する検討も可能となるのであるが、これは「善」（というのは、伝統的世界観に立つという意味で）の社会から疎外された「ヴィラン」のおかれた状況と興味深い対照をなすと云えるであろう。

シェイクスピアの「ヴィラン」の背後に「ヴァイス」の伝統があり、これにマキャヴェリズムの要素が加わっていることは事実であるけれども、所詮、「ヴィラン」は、「ヴァイス」でもなければ、また真の意味のマキャヴェリアンでもない。「ヴァイス」は、ヴァイス（悪徳）であるが故に悪を行う——

And as it is my name, so it is my nature also.^①

——のに対して、「ヴィラン」はヴィラン（悪党）になる——

I am determined to prove a villain. (Richard III, I. i. 30)^②

——つまり悪を自分の行動原理として積極的にとり入れるのであり、それも、これしかとるべき道のない状況に（社会の「アウトサイダー」として）おかれているからなのである。たとえばリチャード（後の三世）は、右の悪

党宣言をするまでに一六行にわたってその動機を説明し、『リア王』のエドマンドも、あるいは新興ブルジョワジールのモットーであったかも知れない一行——

Let me, if not by birth, have lands by wit. (*Lea*r, I. ii. 199)

——で、己れの動機を説明し、そして

All with me's meet that I can fashion fit. (*Ibid*., I. 120)

と、目的のためには手段を選ばぬ態度を明らかにする。

一体に、社会の「秩序」の枠外におかれた「ヴィラン」は、彼らに敵意を抱いている社会の道德観・価値観に頼って行動するわけにはいかない。頼れるのはただ「己れのみ」——

... I am myself alone. (3 *Henry VI*, V. vi. 81)

——である以上、いきおい、個人主義、合理主義、現実主義（とった近代精神）によって行動することになる。マキャヴェリズムそのものも、十五世紀から十六世紀初頭にかけての内憂外患あいつぐ動乱のイタリアにあって、政治的安定と祖国統一の悲願をこめて、一人の憂国の士が考え出した、身を守り、国を守る術であった。国外からはフランス、スペインの軍隊が虎視眈々とイタリアを狙い、国内にあっては都市間の対立、諸侯間の弱肉強食の闘争にあけくれる。外的権威は意味を失い——

... as [if] the world were now but to begin,

Antiquity forgot, custom not known,... (*Hamlet*, IV. v. 103-4)

——ただ己れの「力」(‘virtu’——強い意志と知力) 以外に頼るすべを持たぬマキャヴェッリの見出した状況が、シェイクスピアの「ヴィラン」のおかれた状況に類似していることは注目に値しよう。

しかしながら、マキアヴェッリが美点として説いた「力」——強い意志と知力——を高度に備え、社会的・宗教的良心といった道徳性にわずらわされることなく、堂々と力の政治 (Power politics) を実践するリチャード三世は、性格としては、立派なマキアヴェリアンであるにもかかわらず、リチャードは（そしてこの点ではシェイクスピアの他のどのヴィランも）真のマキアヴェリアンではない。彼が自らを「ヴィラン」（悪党）と呼んでいる事実がなよりの証拠である。マキアヴェッリにあっては、リチャードのような君主は「ヴィラン」ではない。理想的なと云えるかどうかは別として、彼は立派な君主であり、彼の行う数々の殺人も、決して単なる「人殺し」ではなく、国を維持するための必要な行為 (a necessary act of state)、「政治上の方策」 (a political expedient) なのである。マキアヴェリスムの価値は、従来の伝統的な価値の尺度では測れないものであり、それ自体の尺度を、殺人を別の名で呼ぶ尺度を、要求するものである。しかしながら、シェイクスピアの「ヴィラン」は（そしてシェイクスピアは）、従来の尺度で己れを、そして己れの行為を測り、そしてその尺度の最低のところに位置づけるのである。（これは、シェイクスピアと同時代ではあるが、気質も育ちも対蹠的なマロウの描く主人公——*aspiring heroes*——と比較するとき、興味深い特徴である。^⑧また、シェイクスピアの描いた「ヴィラン」が、リチャード三世を除いて、すべて脇役であることも注目に値する。）

この限りでは、シェイクスピアも時代の人であったと云えるであろう。しかしながら、中世的な色彩の濃いエリザベス朝にあって、近代的な合理主義、個人主義が悪と見做されたから悪として表現したというのは、シェイクスピアは時の御用作家となんら異なるところはない。『リチャード三世』の作者は、あるいはまだそのような段階にあったかも知れないが（しかし、彼は「チューダー王朝の神話」を逆用して、現代にも通じる「力の政治」

の典型を見事に描き出してみせた)、人生体験の深まるにつれて、ますます人間性に対する深い洞察を示しているこの劇詩人は、合理主義、個人主義も、それ自体、悪ではないにしても、それが極端になるとき、あるいはそれだけを目的として追求されるとき、悪に転ずる可能性を鋭く見抜いていたのではなかったか？ エアロン(『タスタス・アンドロニカス』)やリチャード三世といった初期の「ヴィラン」の破滅の原因が、(それぞれの劇の性質から)多分に外面的なものであるのに対して、後期の「ヴィラン」(特にイアーゴウ)のそれが内面化されて、彼ら自身の個人主義、合理主義、あるいは現実主義そのものに発していることは(シャイロックにおいて、すでに、彼の破滅の直接の原因が、「正義」を主張する彼のかたくなさにあることは興味深い)、この意味で、注目に価するこれらの「ヴィラン」の破滅を通して、あるいは(これは「ヴィラン」ではないが、冷徹な現実主義者である)イノバールバス(『アントニとクレオパトラ』)のまじめな死を通して、人間は、そして人生は、決して合理主義や個人主義だけで律せられるものではなく、ただそれだけに己れを限ることは、とりもなおさず、それ以外の人生から疎外されるに他ならないということを、シェイクスピアが警告しているとは云えないだろうか？

十七世紀以後の科学の発達に伴い、合理主義、実証主義の批判の矢面に立って、すでに崩れつつあった伝統的価値観の崩壊に、十八世紀の啓蒙運動がさらに拍車をかけ、その行き過ぎは古い伝統的な価値のみならず、すべての「価値」を「事実」から切り離してしまふに至った。その結果、「事実」とは測定しうる量となり、「価値」は人為的な虚構、人を惑わす欺瞞ということになる。^⑤このような状況にあつては、「事実」のみがあつて、人間のよって生きるべき認識、美や善や精神に対する認識を、客観的に実証するもの(the frame of reference)がない。事の善悪美醜の判断は、かくして、個人の判断による他なく、しかも、これは各人の性格、経験といった個人的要素に基づく主観によって大きく左右される以上、精神的混乱は不可避となる。これが近代の不安の、少

なくとも一つの原因であると云えるであろう。

ある意味で、「ヴィラン」の見出した状況は、このような近代人の状況に通じるものがあつた。社会の「アウトサイダー」であり、社会に行われている道徳観、価値観に頼るべくもない「ヴィラン」は、判断の基準も行動の基準も、すべて、己れと己れの経験による「事実」におく。恐ろしいまでに個人主義的で実際的なイアーゴウは、「価値」の観念が全くなく、彼にとっては「愛」も「色欲」にすぎない。デズデモナに対するドダリーゴウの恋心をも利用して私欲を満たすイアーゴウにとって、意味をもつのはただ「事実」とその「効用」のみである。オセロウの悲劇は、ある意味で、彼本来の「価値」——愛——の世界から、それも取るにたらぬ「事実」——一片のハンカチという「目に見える」証拠——にあざむかれて、イアーゴウの「事実」の世界に落ちて行ったところにあるとも云えるであろう。しかしながら、イアーゴウは、勝利をおさめたかに見えた時、思いがけないところから、「価値」の世界の反撃をうける。利害しか眼中にない自己中心的なイアーゴウにとって、これまで自由にあやつってきた自分の妻が、命を捨ててまで、しかもはや死んでしまっている女主人に忠義をつくそうとは思ひも及ばぬことであつた。イアーゴウほどの冷徹な知性にもかかわらず、というよりその知性の故にこそ、エミリアを理解することができなかったのだ。知性のみに頼り、他の一切を認めないことは、とりもなおさず、人間に対する、そして人生に対する理解を狭め、より広い人生から疎外されることを意味する。「俺は四七の二十八年間、世間を見てきたが、損と得の区別がつくようになってから、自分の愛し方を知っている人間に出会つたためしはない」(U. iii. 312-6)と、(彼は自分を愛するすべを知っているというのであろう)うそぶいたイアーゴウが、まさに「自分の愛し方を知らぬ」人間の(彼の目からみれば)愚かさの故に滅びるのである。イアーゴウの悲劇は、あるいは、「事実」のみを認め、利益追求のみにあけられる疎外された近代人の悲劇であつたと云

えるかも知れない。

このようにして、シェイクスピアは、単に当時の世界観によるのではなく、近代的合理主義、個人主義そのものの中にひそむ悪の可能性の故に——他を傷つけ、自らもより広い人間性、人生から疎外されて、遂には自滅にいたる結果を見抜いた故に——、これを悪として「ヴィラン」において斥けたとするならば、他方、伝統的な価値観を、そのまま、無批判に受け入れたのでもなかった。エリザベス朝の（この意味ではどの社会の）伝統的な世界観も、それ自身の中に「偏見」に墮する可能性を含んでいるからである。もし、合理主義、個人主義だけに徹して他を一切みとめないことが、より広い人生からの疎外を意味するとすれば、他方、伝統的価値観・世界観の中にぬくぬくと自己満足して、その外にあるものを無視あるいは否定することは、その社会の（不可避的に）もつ偏見の故に、やはり、より広い人間性からの疎外を意味すると云えるであろう。「ヴィラン」（たとえばリチャード三世）、あるいはこれに準ずる人物（とくにシャイロック）は、この意味で、より広い人間性のための抗議の一つの表われとみることできる。あるいは、これが、シェイクスピアが「ヴィラン」の中に見いだした劇的機能の一つであつたかも知れない。

いずれにせよ、シェイクスピアは、杓子定規に、伝統的な価値観で近代的な要素を否定しようとしたのでも、また伝統的なものをそのまま認めようとしたのでもなかった。いずれの価値もドラマの世界の緊張の中で変容され、修正されて、さらに深いものになっている。われわれの関心も、いかに困難なこととは云え、あたうる限り、これを劇的に（ということは詩的にも）とらえようとするものでなければなるまい。

一 伝統的世界観と新しい学問

中世の神学者たちが、想像力の限りをつくして精巧なものに仕立て上げた伝統的な「世界の機構」(the world scheme)は、実は、単なる「宇宙絵図」(a picture of the universe)以上のものであった。それは人生そのものに対する一つの解釈——世界に対する、自己に対する、そして神に対する人間のすべての知識が矛盾なく、その中にうまくおさまる一つの人生観だったのである。彼らの考えた宇宙とは、上は神から下は無生物にいたるまで、整然たるヒエラルキーを構成する宇宙であって、その中にすべての創造物がそれぞれ神によって定められた位置を占めるというのであった。これが「秩序」(order)というものであり、それぞれ固有の位置を正しく守るのがすべての創造物の義務であって、もし自力によって己れの定められた位置より高い位置を望もう(aspire)とするならば(usurpation)——横領、篡奪——とはこのことである、それは本来の位置以下に墮落する場合と同様、「秩序」を乱すもとなり、このようにして生じた「無秩序」は、人間('single state of man'—*Macbeth*, I. iii. 140)や社会のみならず、自然界にも反映して天変地異をひき起す(*Macbeth*, II. iv, etc, etc)という、「対応の理論」(the doctrine of correspondence)に基づく宇宙観・人生観であった。このような、それだけで完結して、如何なる変革(innovation)をも野心をも許さない「有限性・究極性の原理」(the principle of finality and finiteness)^⑤の支配する伝統的な思想が、ルネサンスにおいて解放された人間の無限の憧れを満たすようなものでなかったことは明らかである。(マローウの「高きを憧れる主人公」——aspiring heroes——は、このような中世的「秩序」の枠を無視して、無限に挑戦するルネサンス人の憧れの体現であると云えるであろう。)

一方、このような思想体系の本質的な特徴が、あらゆる意味での「関係」(relation)にあることは容易に認めら

れるであろう。それは、いかなるものの自立 (independence) をも、また孤立 (isolation) をも許さず、すべてのものは「存在の偉大な連鎖」 (The Great Chain of Being, by Arthur O. Lovejoy, 1936) においてとらえられねばならなかったのである。譬えを変えて云うならば、それは、パウロの説くように、^⑧ 人間の体の各部分のようなものであって、お互いに支配し、支配され、他を助けると同時に助けられて、はじめて完全な存在となるのであり、もしが己れの自主性を主張したり、あるいは謀叛を起して、たとえば、「手足」が「胃袋」にとって代ろうとするならば、それはからだ全体の「秩序」を乱し、手足にとっても胃袋にとっても、またからだ全体にとっても破壊となる、という訳で、人間関係においても、同様に、他との正しい、本来の関係を維持することによってはじめて個人の、社会の、国家の、そして宇宙の「秩序」が保たれるというのであった。神の下、いかなるものも孤立し、自足すると考えられるものも、また自分で自分自身の法を作る権利をもつものもないのである。フッカー (Richard Hooker) が云う――

… See we not plainly that obedience of creatures unto the law of nature is the stay of the whole world? [My italics]

このような社会にあって、他との関係を一切認めず、自己を主張する個人主義、あるいは自己のおかれた位置や既成の秩序に批判の目を向ける懐疑主義、また判断の基準を外部の (客観的な) 權威 (authority) におかず、自分自身の経験や考えにおく経験主義^⑨や主観主義といった近代精神が、この上ない悪と見做されたであろうことは想像に難くない。(シェイクスピアの「ヴィラン」は、当時の社会通念 (つまり偏見) のために、このような「秩序」の概念に基づく一切の「関係」を絶たれて孤立し、その故に個人主義などの近代精神をとり入れる「アウトサイダー」なのである。) 従って、ロレンゾウ (Lorenzo) が

He trust my selfe, my selfe shall be my freend; (The Spanish Tragedie, III. ii. 118)^①

と云うとき、またリチャードが

... I am myself alone. (3 Henry VI, V. vi. 81)

とその孤立性を主張するとき、あるがハインリッヒが

Thou, nature, art my goddess; to thy law^②

My services are bound. Wherefore should I

Stand in the plague of custom, ... (Lear, I. ii. 1-3)

と外的權威を否定し、イデオロウが

Virtue! a fig! 'tis in ourselves that we are thus or thus ... (Othello, I. iii. 322-3)

とその自主性を誇らかに宣言するとき、当時の観衆にとっては、それだけで彼らが悪党であることを知るのに十分であったに違いない。ハムレットのような孤独な瞑想者は、ブラッドブルック女史も云うように、当時にとっては全くの新機軸 (innovation) であった。^③

しかしながら、このような伝統的世界観がすでに絶対的なものでなくなっていたことは、先にみた通りである。科学の面において (コペルニクス)、宗教の面において (ルーテルやカルヴァン)、また政治理論 (マキアヴェッリ) や倫理・心理学の面 (モンテーニュ) においても、中世的な思想体系を批判し攻撃する「カウンタ・ルネサンス」の流れは、ますます強力な影響を現わし始めていた。中でもマキャヴェリズムの影響を最も強く示している「ヴィラン」は、このような伝統的価値に正面攻撃を加えるのである。ボズワスの戦いの前夜、夢の中に現われた彼のかつての犠牲者の亡霊の呪いに悩まされながらも、開戦にのぞんで

Let not our babbling dreams affright our souls :

Conscience is but a word that cowards use,

Devised at first to keep the strong in awe :

Our strong arms be our conscience, swords our law.

(Richard III, V. iii. 308-11)

と豪語するリチャード、また、

An idiot holds his bauble for a god.^⑭

(Titus Andronicus, V. i. 79)

とうそぶく無神論者エアロンに、その最初の表現がみられるであろう。

しかしながら、伝統的価値に対する批判は「ヴィラン」に限ったことではない。彼らのような直接攻撃の形をとらないけれども、もっと微妙な、間接的な方法によって（作品全体を通しては勿論）、他の人物の口を通して、既成の秩序、因習に対する諷刺や批判はみられるのである。たとえば、フォールスタフの存在そのものが、貴族の社会およびその社会の代表する価値の間接的な批判になっていることは周知の通りだが、彼が自己弁護として語る（自然界に対する観察の結果としての）自然主義^{ナチュラリズム}は、貴族たちの行動（the self-seeking）のパロディであると同時に、先に引用したフッカの伝統的な自然観を根本からゆさぶる新らしい自然観^⑮を示して、不吉な影を投げかける。彼がシャロウ（Shallow, a country justice）を食い物にする手口は、ロダリーゴウを食い物にするイアーゴウのそれを思わせるものがある――

... if the young dace be a bait for the old pike, I see no reason in the law of nature but

I may snap at him [i. e., Shallow].

(2 *Henry IV*, III. ii. 356-9; my italics)

彼の「自然主義」において、フッカと全く同じ表現を使いながら、その中に全く反対の概念をもったのに対して、例の「教義問答」では中世的な価値——名譽——を、その現実主義で骨抜きに（「空」に）してしまったフオールスタフは、また、当時の社会通念——天職（*vocation*）——を逆用することによって、伝統的な世界観に皮肉な批判の矢を放つのである。「もうこんな生活はやめた。俺は行いを改めるんだ」と云ったところへ王子ハルから「明日はどこでやるんだね、おいチャック？」と水を向けられて、うっかりのってしまったフオールスタフ、「大変な改めようだな、お祈りから巾着切りか」とからかわれて、向きになって抗議する——

Why, Hal, 'tis my vocation, Hal; 'tis no sin for a man to labour in his vocation. ㊦

(1 *Henry IV*, I. ii. 117-8).

「天職」——神から与えられた仕事——とは、たしかに思いつきであった。自己に対する、そして社会に対する各人の義務（そして職業）は、神により、自然によって、定められたもので、勝手に変えることは許されず、各人がこれを認め、これに従うことにこそ、社会の秩序と個人の幸福がある——

We see the whole world and each part thereof so compacted, that as long as each thing performeth *only that work which is natural unto it*, it thereby preserveth both other things and also itself. ㊧

(Hooker, *op. cit.*, I, ix, i.)

——というのが、「位階の法則」(the laws of degree)に基づく当時の社会通念だったからである。

フオールスタフの場合は問題ないかも知れないが、一般に、このような公認の道德観が、殊更にくどくどしく語られる場合は、それを語る人物がどのような人物であるかに特に注意する必要がある。たとえば、王権の神聖

をとくジョン・オヴ・ゴーンツ (John of Gaunt, Duke of Lancaster. See *Richard II*, I. ii. 4-8, 37-41) のように、その言葉が語り手の善良な性格を表わす場合もあるが (そして、劇的には、これが彼の破滅を保證することになる)、伝統的な価値をとく言葉そのものは、必ずしも語り手が善良であるという保証にはならない。むしろ語り手の悪であるいはその本来の意図を、隠すための口実にすぎない場合も多いのである。たとえばユリシーズ (Ulysses) の有名な「秩序論」 (*Troilus and Cressida*, I. iii. 75-137) にしても、(策士としての) 彼の性格とその演説の本来の目的 (アキリーズを戦場へかり立てるといふ、実目的な目的) を考えるとき、堂々と説き進めるユリシーズが内心浮かべていた (と思われる) 皮肉な笑いを感ぜない訳にはいかない。同様に、エクサタ公 (Duke of Exeter) の社会の分業を説く言葉――

For government, though high and low and lower,

Put into parts, doth keep in one consent,

Congreeing in a full and natural close,

Like music. (*Henry V*, I. ii. 180-83)

――を、得たりとばかりとらえて、

Therefore doth heaven divide

The state of man in divers functions,

Setting endeavour in continual motion ;

To which is fixed, as an aim or butt,

Obedience ; ... (*Ibid.*, II. 183-7)

と引き継ぎ、蜜蜂の比喻^⑧を十八行にわたって展開し、さらに比喻を変えて十行、綿々と説くカンタベリ大監督 (Archbishop of Canterbury) の意図が、

Therefore to France, my liege. (Ibid., l. 213)

にあったことを知るとき、彼の詳細をきわめた大演説も、それだけ余計に、空々しく響くのである。彼の説く言葉そのものは、中世以来の伝統をふまえた、一点非の打ちどころない立派なものである。しかし、この伝統的な宇宙観——本来それ自体が目的であるべきもの——が、個人の目的のための手段となってしまうとき、この、一見正統的な思想自体、微妙な変容を受けるのを認めないわけにはいかない。このような『ヘンリ五世』の世界にあっては、従って、たとえ己れの陰謀をあばかれたスクロップ (Lord Scroop) が

Our purpose God justly hath discover'd (II. ii. 151)

と神の摂理を認めても、またヘンリ五世自身、

... God so graciously hath brought to light

This dangerous treason lurking in our way

To hinder our beginnings. (Ibid., II. 185-7)

と神の御業をたたえ(る)ことによって幸先のよさをほめめかしたとし、ても、われわれは、ヘンリ王の言葉を額面通りに受けとるわけにはいかない。それが神の加護を楯に、遠征軍の士気を高めようとするデェスチャにすぎないことは、王がすでに手を廻していたというベッドフォード (Duke of Bedford) の言葉——

The king hath note of all that they intend,

By interception which they dream not of. (Ibid., II. 6-7)

——が何よりの証拠であろう。そして

Now are we well resolved: and, by God's help,

And yours, the noble sinews of our power,

France being ours, we'll bend it to our awe,

Or break it all to pieces: ... (I. ii. 225-6; my italics)

というヘンリ王の言葉に（「神の加護により」というセリフは、ほんの申し訳につけたとしか思われない。重点は、明らかに、第二行目にある。カンタベリ大監督の言葉を、コンテクトから切り離して借用すれば、たしかに、「奇蹟の時代は終わった」のである。何事をなすにも手だてが必要——

... for miracles are ceased;

And therefore we must needs admit the means

How things are perfected. (I. i. 67-9)

——なのだ）。うわべは中世的伝統的なよそおいをこらしながらも、一皮むけば、目的と手段をはっきり区別し、目的のためには手段を選ばない、新しい世界がうかがわれるであろう。^⑩それは既に『ジョン王』において庶子フィリップ（Philip the Bastard）が見かけのヴェイルをはぎとり、その実体をあからさまに批判した「便宜主義」（‘Commodity’; see *John*, II. i. 561-98）の世界であり、『ヘンリ四世』の「時勢の要求」（‘necessity’……と、もっともらしい表現に変わっているが）に左右される「政治的手腕」（statecraft）の世界であった。^⑪このような状況にあって、ヘンリ五世の理想的な近代君主としての確立は、伝統的な王権の形式（ceremony）に近代的な倫理をより込んで、新らしく内容を充実させる方向をとるのである。^⑫

このような、伝統的価値観に対する（いろいろな形で）批判は、しかしながら、なにも歴史劇に限ったことではない。喜劇においても悲劇においても、シェイクスピアは、それぞれのコンテクストにおいて批判し検討する。そして『末よければ総てよし』にいたって、ヘリナ(Helena)の個人主義的傾向に対する批判を含みながらも、なお、伝統的な「秩序」のヒエラルキーにおいて占める人間の位置よりも、個人の徳、個人の行いの方が大事であるという主張がみられるのである。科学に限らず、政治理論にしても結構な主義主張にしても、それを活かすも殺すも要は人間次第ということであろうか。生まれがよくて、しかも人間が立派なら、それに越したことはない。そして、理想的には、そうあるべきであったのだ。しかしながら、生まれという、単なる偶然の幸運をよいことに（自分の人間的価値は棚に上げて）、身分の低いものの人間的価値を、ただ身分が低いというだけで、認めようとしないバートラム(Bertram)の思いついた態度に、シェイクスピアは、ここで軽くお灸をすえているように思われる。このシェイクスピアの態度は、しかし、同時に「ヒエラルキーの原理」そのものに対する批判をも含んでいる。由々しきことと云わねばなるまい。ただ、このような批判を肯定的に打ち出せたのは、あるいはこの劇が女性を主人公とする「喜劇」であつたからかも知れない。^②

それはともかく、社会的な身分よりも個人的な徳の方が大切と説くフランス王の（そして恐らくはシェイクスピア自身の）態度と関連して、殆ど同じ時期に書かれたとされている『以尺報尺』が、外的な「権威」(authority)そのものよりも、「権威」とそれをつかさどる「人間」との関係（理想的には、両者は一致すべきものののだがこの間の乖離は、云うまでもなく、「見かけ」(appearance)と「現実」(reality)という「シェイクスピア的テーマ」につながるものである）を問題にしていることは興味深い。旁々、伝統的な価値を検討するシェイクスピアの、この頃の探究の位置を示すものと云えるであろう。権威も大事だが、より重要なのはその用い方であり、それを用いる人間

であるとするシェイクスピアの態度は、多分に個人主義、主観主義的な傾向を帯びたものであった。これが、やはり同じ頃の作品『トロイラスとクレシダ』における、トロイラスやパリスの「名誉」や特に「価値」についての主観主義、およびギリシャ、トロイ兩陣営における個人主義に対する、あのような形で検討となつたのであろう。ここにみられるのは、まさに渾沌 (chaos) と無秩序 (disorder) の相である。ユリシーズがその有名な演説の中で指摘するように、アキリーズは「位階」(degree) を無視して己れの本分を果さず、パリスもトロイラスも、理性 (reason) が情欲 (passion) を支配すべしとする小宇宙 (としての人間) 本来の「秩序」のあり方を転倒させ、理性を抑えて情欲に従う。そして、理性と道徳を、自然と国家の法を説くヘクタが、結局、トロイラスの主張に譲歩し、最後に非業の死をとげることは、意味深いことと思われる。事実、この劇で死ぬ名のある人物は、このヘクタ (とアキリーズのお気に入り) のパトロクラス) だけなのである。「位階を廃すれば」とユリシーズはその大演説において次のように述べた――

Then every thing includes itself in power,

Power into will, will into appetite;

And appetite, an universal wolf,

So doubly seconded with will and power,

Must make perforce an universal prey,

And last eat up himself. (I. iii. 119-24)

しかしながら、この劇の範囲内では、このような状態は起らない。わずかにヘクタの死が将来のカタストロフィを暗示するだけである。ここにもこの「問題劇」の性格と含みがみられるであろう。

「意志」と「我欲」に「力」の結びついた個人主義が、中世的「秩序」の世界を殆ど壊滅のうちにまで追い込む——

It will come,

Humanity must perforce prey on itself,

Like monsters of the deep. (Lear, IV. ii. 48-50)

——のは、『リア王』の悲劇の世界においてであった。ここにおいて、原始社会的な伝統 (the communal tradition) をもつ中世的封建社会が、利欲的、競争的 (competitive and acquisitive) な近代的個人主義の全面的な攻撃を受けるのである。かつて歴史劇において、フォールスタッフを通して喜劇的に、あからさまに表現されるか、あるいは利己的な貴族たちの行動を通して、公式的な「秩序」の概念の背後に暗示されるに止まっていた近代的な「悪」の精神が、ここにいたってその全貌を現わし、「秩序」の世界ははるか後方に退いて (しかし決して見失われることはない)、伝統的な価値の崩壊はその極に達した観がある——

... love cools, friendship falls off, brothers divide : in cities, mutinies ; in countries, discord ;
in palaces, treason ; and the bond cracked 'twixt son and father. ... there's son against father :
the king falls from bias of nature ; there's father against child. We have seen the best of our
time : machinations, hollownness, treachery, and all ruinous disorders, follow us disquietly to our
graves. (Lear, I. ii. 116-25)

これこそ中世の神学者たちが丹誠して仕上げた「秩序」の世界の全面的崩壊でなくて何であろう。しかし、これは、なにも『リア王』の世界に限ったことではなかった。近代への動きは、「新しい学問」 (new philosophy)

は、遂に太陽をも、地球をも、伝統的な「秩序」の体系において占めていた位置から追い出し、次々に現われる新しい事実（地理的に云えば新しい世界の発見、天文学で云えば新星の発見など）は、「有限性・究極性の原理」を根からゆさぶって、整然たるヒエラルキーを構成していた宇宙を「元子」(a-tom)にまで分裂させ、地上では人間が一切の「関係」を否定して、父もなく子もなく、各人が「不死鳥」気取りで自己の特殊性と自主性を主張し、外部の權威を否認してそれぞれ独自の法を定め、個人主義を唱えるのである――

And new Philosophy cal's all in doubt,

The Element of fire is quite put out;

The Sunne is lost, and th'earth, and no mans wit

Can well direct him, where to looke for it.

And freely men confesse, that this world's spent,

When in the Planets, and the Firmament

They seeke so many new; they see that this

Is crumbled out againe to his Atomis.

'Tis all in pieces, all coherence gone;

All iust supply, and all Relation:

Prince, Subject, Father, Sonne, are things forgot,

For every man alone thinks he hath got

To be a Phoenix, and that there can bee

None of that kinde, of which he is, but hee.

(John Donne, *The First Anniversary*, ll. 205-18).^⑧

『リア王』の悲劇は、このような近代的懷疑主義によるヘンシズムに、伝統的なキリスト教的ヘンシズム (the righteous endure "hard and heavy casualties," while the godless enjoy "impunity and prosperity")^⑨の要素が加わって、独自の世界を作りあげていると云えようか。

それはともかく、シェイクスピアがこの新しい傾向、「新しい学問」に無関心でなかったことは間違いないと思われる。直接「新しい学問」という表現は使っていないけれども、この思想の動きに対する彼の態度は、次のラフェー (Lafew) の言葉にみられないであらうか?——

They say miracles are past; and we have our philosophical persons to make modern and familiar, things supernatural and causeless. Hence is it that we make trifles of terrors, ensconcing ourselves into seeming knowledge when we should submit ourselves to an unknown fear.

(*All's Well That Ends Well*, ll. iii. 1-7)

伝統的な旧秩序に属するグロスタ (Earl of Gloucester) の種の学問 ('the wisdom of nature', i. e., natural philosophy) のことを知らなかった訳ではない。ただ、このような学問が、たとえ何だかだと理窟はつけても、結局人間は天変地異の影響から逃れることができない——

These late eclipses in the sun and moon portend no good to us: though the wisdom of nature can reason it thus and thus, yet nature finds itself scourged by the sequent effects: love cools, etc.

(*Lear*, I. ii. 112-6)

——というのである。

奇蹟が十二使徒 (the Apostles) と共に終ったというのは、殆どのエリザベス朝新教徒の信念であったが、ここでラフューが云う「哲学的な人たち」というのは、あるいは、奇蹟のみならず神や魂の存在まで否定したローリ (Sir Walter Raleigh) とその一派——シェイクスピアのいわゆる「夜の学派」(‘the Schoole of night’ (F.) — *Love’s Labour’s Lost*, IV. iii. 255) ——をさすともてよいかも知れない。いずれにせよ、ここで、シェイクスピアは、人間の、特に近代人の、人間の能力に対する過信、人間に分らぬことはない、出来ないことはないという思い上りを、そして、本来、人間の理解を越えたものを何とか理窟をつけて分った気になっている愚かさを、間接的にではあるが、たしなめてはいないだろうか？ どうでも説明をつけねばやり切れない不安な気持ちにおそわれる(だから)と尤もらしい理窟をつけてその中に逃げ込む——‘ensconcing’, i. e., sheltering (oneself) within or behind a fortification——のであろう) のも、畏怖の心を失った人間の思い上りによるのかも知れない。いずれにせよ、このようにみると、亡霊を見るまでは懷疑的であったホレイシウが、「一所遍在」(‘Hic et ubique’ — *Hamlet*, I. v. 156) の亡霊の地下からの声をきくべ、

O day and night, but this is wondrous strange! (Hamlet, I. v. 164)

と叫ぶとき (例の地口——pun——を入れてではあるが) 論すように答えるハムレットの有名な言葉——

And therefore as a stranger give it welcome.

There are more things in heaven and earth, Horatio,

Than are dreamt of in your philosophy. (Ibid., II. 165-7; my italics)

——は、単なる格言的表現以上の意味合いを帯びてくるのではなからうか？ (ここが問題なのは、云うまでも

なく、ハムレットのいわゆる「哲学」が、ローリー一派の「夜の学派」あるいは「新しい学問」をさしているのかどうかということではない。人間の理解を越えたものの存在をそのまま認めるハムレットの心的態度が問題なのである。^⑤科学的合理主義に対するシェイクスピアの態度はここに極まる。「新しい学問」そのものを否定するということではない。ただ、それがすべてだという態度を否定し、人智を越えたものの存在を、そして「秩序」を——たとえ人為的な、インスティテューショナル制度化された秩序・位階の概念に批判の目を向けたとしても——、シェイクスピアは深く確信していたのである。

人間には、それが何であれ、人間を越えた「何か」——人間が畏怖を感じ、それによって行いを正すものが、なければならぬ。かつては神が、そして神の怒りの現われとしての天雷や天変地異、あるいは奇蹟が、それであった。しかし今や奇蹟の時代は終り、雷も天変地異も「新しい学問」で「説明される」自然現象にすぎなくなってしまった。「事実」が、その持つ（あるいは伝統的に与えられていた）、「価値」ないし「意味」を失ってしまったのである。そして神を否定し、良心も道德も認めず、ただ「価値」から切り離された「事実」のみを「自然」としてこれに従い、己れの目的や利益のみを追求する人物が現われる。このような畏れを知らぬ人間ほど恐ろしいものはない。何をしでかすか分ったものでない。また実際、平気で何でもやってのける。そして多くの場合、このような、己れの目的追求と関係のない一切のものから疎外されて、道德にも良心にもわずらわされない人間は、その冷淡な態度の結果として、ある程度まで成功を収めるのである。そして成功が続くかぎり、それはある種の無感覚を生み出す。危機的瞬間にたちいたって初めて自己の疎外を自覚し始めるのが一般のようである。しかしながら、シェイクスピアには、終始、一切の人間的感情に無感覚であり、たとえ最後が挫折に終り、

身を滅ぼす結果になっても、あくまで挑戦的な態度をくずさず、後悔することのない人物がいる。これがシェイクスピアの「ヴィラン」なのである。^②

二 ヴィランとその周辺

(一)

ここで、一応、私なりの「ヴィラン」についての考えを整理しておこう。彼らは、先ず

(1) エリザベス朝社会での「アウトサイダー」であり、従って個人主義的傾向が強いということである。が、勿論、これだけでは十分ではない。(何らかの意味で) アウトサイダーで、しかも個人主義的な傾向をもつものに、

「ヴィラン」の他にも、たとえば、史劇では『ジョン王』のバスタード (Philip the Bastard)、悲劇では『ジェーリアス・シーザ』のキャシアス (Cassius)、喜劇では『末よければ総てよし』のヘリーナ (Helena) がいるからであり、また、アウトサイダーではないけれども、個人主義的な傾向を示す近代的人格の人物に (これは喜劇の女主人公に多い)、たとえば、『むだ騒ぎ』のピートルス (Petrus) がいるからである。これに『じゃじゃ馬ならし』のキャサリーナ (Katherina) を加えてもよい。^③ さらにいま一人、社会の秩序が敵として存在していたために (たとえばユダヤ人シャイロックや、僞僕のリチャードのように) 疎外されてアウトサイダーになったのではなく、社会そのものが腐敗し、伝統的な秩序も価値も意味を失って、一切の外的權威に頼れなくなった (この意味で「ヴィラン」と同じ疎外された状況におかれた)、個人主義的な、懷疑主義的人物にハムレットがいる。彼の見出したこのような状況こそ、「荒地」によって象徴される近代的不毛の状況 ('tis an unweeded garden/ That grows to seed'; etc.

—*Hamlet*, I. ii. 135ff.)であり、その中にあって己れ一人を頼りに真の価値を模索するハムレットの姿は、まさに近代人の悲劇の象徴と云えるであろう。私はハムレットを「ヴィラン」(*Ibid.*, II. ii. 599)と呼びたくはないけれども——もつとも、そう呼ばれたとしてもハムレットに文句はないかも知れないが(「Swounds, I should take it:」—*ibid.*, I. 603)——しかし、一切の外的権威を、既成^{モラリタティ}の制度を否定し、すべてに懐疑の目を向ける個人主義的なハムレットは、私の考える「ヴィラン」的人物に属する^③。「アウトサイダー」であるというだけでは、勿論「ヴィラン」^④として十分ではないけれども、これが個人主義的な傾向をもつ近代的性格の一つの大きな原因である故に、私はこれを「ヴィラン」の第一の必要条件とし、この条件を満たす人物を「ヴィラン」的人物と呼ぶことにする。ただし、近代精神は、ある意味で、疎外の精神と云えないこともないからである。しかしながら、「ヴィラン」的人物は、所詮「ヴィラン」ではない。「ヴィラン」には、右の要素の他に、中世道德劇以来の

(2) 「ヴァイス」^⑤(Vice)の要素が加わるのである。元来、人間の内心の葛藤^{モラリタティ}(Psychomachia)^⑥のキリスト教的アレゴリに、人間そのものを登場させることによって、一段と劇的要素を加えた道德劇が、中世からルネサンスを切り離す「世俗化」(secular revolution)の流れにまぎ込まれ、一五五〇年以後、「人間」(Everyman)の普遍的なドラマを内に含んだ本来のヴィジョンの崩壊とともに、道德劇も世俗化し、もともと説教を目的とする隠喩の世界に属していた寓意的人物(allegorical figure)——「ヴァイス」——も旧来の擬人化やタイプから脱して、新らしく名と場所('A local habitation and a name'—*A Midsummer-Night's Dream*, V. i. 17)を与えられ、歴史上の人物の属する現実の世界に(彼本来の世界であった' metaphorical'な世界から'literal'な世界に)姿を現わす。異質な要素を含む道德劇(hybrid play)の出現である。この種の劇の目的は、信仰をとく「奇蹟劇」(mysteries, or miracles)と違って、行いの道をとくことにあり、その題材も聖書以外の歴史や伝説に求めることになる。『アピ

アスとヴァージニアの悲喜劇』(A new Tragical Comedie of Apus and Virginia) は、この種の最初のもつと云えるであろう。セネカの影響をうけた、キリスト教的というよりはルネサンスの古典的雰囲気をもつこの劇のモラルは、名声、名誉、運命といった世俗的な主題にあり、また道德劇のコンヴェンションによって外面化された内心の葛藤が、再び内面化され、個人の心の内部の分裂した諸々の声として、主観性が与えられていることは注目しに値する。そして『キャンバイシース』(Cambises) のアンビデクスタ (Ambidexter) の登場におよんで「ヴァイス」の歴史に新生面が開かれるのである。彼の名前そのものが、彼の身分の変化を示している。それはもはや「傲慢」^{イデオ}「嫉み」^{エネジス}「貪慾」^{アウグリス}といった単なる道德上の名称 (moral designation) ではない。それは「ヴァイス」の(悪の)特性の説明ではなく、役柄の説明であり、この時期の「ヴァイス」の主な演劇的特徴——彼の瞞着の手腕 (his dexterity in deceit)——を示したものであった。これが『コモン・コンディションズ』(Common Conditions) の「ヴァイス」コモン・コンディションズ^⑦において完全なものとなる。彼は、時には、瞞着の必要に応じて、マースタ・アフクション (Master Affection, i. e., amorous passion) などと偽名を用いたりするが、勿論、このような肩書^{タイトル}きは、本来の徳性 (の擬人化) に属していた本質的な意味も力も持っていない。かつての説教の習慣の空しい遺物にすぎない肩書きは、ただ、道化 (fool) として、諷刺家 (satirist) として、また誘惑者 (seducer)、陰謀家 (intriguer) としての「ヴァイス」の伝統的な役柄を生かすために用いられたに過ぎず、彼の悪が犠牲者に与える如何なる道德的影響をも規定する^⑧ことではないのである。実話をもとにして作られたこの喜劇 (An excellent and pleasant Comedie, termed after the name of the Vice, Common Conditions, drawne out of the most famous historie of Galatrus Duke of Arabia) から、道德劇の「ヴァイス」のもつ比喩的な意味合 (metaphorical significance) は消散し、「ヴァイス」も又、ただ手練手管とその喜色満面の説明ぶりで自分が「ヴァイス」であることを例証し、

その狡猾な言い逃れと瞞着で観衆を喜ばせるだけの人物になり下ってしまった。伝統的な比喩的環境を失って瞞着の化身となった「ヴァイス」は、かくして、タイプや抽象概念でなく、現実の人間にかかわる劇の中で、不安定な地位を占めることになる。隠喩の世界にあって、「ヴァイス」が「ヴァイス」として行動する限り、必要であった彼の悪の動機が、彼の説明の中に、とってつけたような、しかし実際のな形で入り込み始めるのもこの頃からである。「ヴァイス」の発展の歴史は、これ以後、彼が新らしく見出した、人間の掟や因習が支配する世界に帰化し、道徳律の下にある人間 (moral creature) に同化しようとする過程をたどる。つまり、「ヴァイス」の人間化、内面化、そして心理化 (psychologization) である。シェイクスピアの「ヴィラン」がこの延長線上にあることには問題はないであろう。

というのは、シェイクスピアによって「人間化」され、心理の裏づけを与えられた「ヴィラン」にして (特に初期の「ヴィラン」——エアロンやリチャード——) ⑤なお「ヴァイス」の要素がかなり強く残っているからである。と云っても、それは、必ずしも劇的にマイナスであるということではない。たとえば、「ヴァイス」本来の説教的要素は、⑥「ヴィラン」の独白にも、また、たとえばイーアーゴウの、ロダリーゴウやキャシオウあるいはオセロウその人に対する言葉 (というより説教) にもみられるし、また、道徳劇のプロットを構成していた実例 (demonstration) による徳性解説 (moral exposition) の、用語上きまりきった一つの型——

You shall see, thus you see, and thus you have seen. ⑦

——は、シェイクスピアにあっては、「ヴィラン」が観衆に向かって前もって自分の計画を打ち明け、それが実行された (これがデモンストレーション) ⑧後で一人舞台に残って皮肉な解説を加えるという形でとり入れられているが、これらの説教的な要素が、「ヴィラン」がそれぞれの立場から伝統的価値を批判し諷刺する手段として如

何に有効に用いられているかということは、いまさら説明するまでもあるまい。さらに、「ヴァイス」の（観衆——というより会衆（congregation）という方が適切かも知れない——に、彼が行う悪の実例でもって悪の解説をするという）説教的な態度が、この伝統をひく「ヴィラン」の、彼の悪に対するアモラルな態度の（少なくとも部分的な）説明となるであろう。同時に、説教の際、「ヴァイス」の示す諷刺的、冷笑的なユーモア（satirical mocking humour）も「ヴィラン」に受け継がれて、彼独特の「小鬼のような陽気さ」（impish gaiety）となるのである。

しかしながら、説教的な要素のほかに「ヴィラン」の受け継いだもつと重要な要素は、その演劇的な要素、つまりその「悪巧み」（intrigue）とその手口（all forms of deceit and moral sophistry）^④であろう。これが、「ヴィラン」的人物と「ヴィラン」を区別する一つの大きな要素である。ただし、「イントリーグ」こそ「ヴィラン」の身上とも云うべきもので、これは先に述べた道德劇の実例教育的傾向およびその実演者兼解説者としての「ヴァイス」の伝統的な役割と結びつくものであった。他の人物による「イントリーグ」との違いはここにある。

「ヴィラン」の己れの悪に対するアモラルな態度も、また悪行の結果でなく悪行そのものを目的とする「悪の芸術家」とさえみえる彼の態度も、ともに、悪をなすことがつまりは道德教育のデモンストレーションであり、これができるだけ巧妙にやっつてのけることこそ他ならぬ目的であった「ヴァイス」の伝統によると云えるかも知れない。

それに、「イントリーグ」のもつ魅力は、もともと、道德にではなく、知性にかかわる、純粹に知的なものであると云えるであろう。勿論、瞞着される悲劇の主人公に視点をおく限り、重点は犠牲者の目に映る事実とその現実の乖離におかれることになり、その効果は悲劇的皮肉（トラジック・イロニー）ということになるが、しかし、このような乖離が達成された手段に強調がおかれるとき、その効果はまた違ったものになる。われわれが「ヴィラン」に従ってその

画策の一端をチェックしながら追って行くと、道徳的な判断は部分的に停止状態になるからである。われわれが、マクベスが謀殺の大罪を犯すのを見つめるのに対して、イーゴウがゲームをしていると見るのも、この故に他ならない。^⑬

ともかくも、このようにみると、*「ヴィラン」*は、その系譜において、劇的機能において、またその性格において、本質的に、他の歴史的な人物とは異質の存在、次元を異にした存在であり、この意味でも「アウトサイダー」ということになる。

しかしながら、「ヴァイス」の系譜に属するというだけでは、*「ヴィラン」*の条件としては十分ではない。元来「ヴァイス」には二つの面――

He can play too parts, the foole and the K[na]ve.^⑭

(*The Conflict of Conscience, marginal gloss following l. 390*)

――があるのだが、道徳劇の世俗化に伴ない、これが喜劇と悲劇に分裂した時、「ヴァイス」もまた分裂して、「悪巧み」による瞞着をこととする悪党(knave)の面を主として「ヴィラン」が受け継いだのに対して、浮かれ騒ぐ陽気な喜劇的人物ないし諷刺家としての面を主として受け継いだ、「ヴィラン」の喜劇的兄弟(comic brother)とも云うべき道化(fool)^⑮がいるからである。「主として」と云ったのは、勿論、「ヴィラン」と「フール」がそれぞれ悲劇あるいは喜劇にしか存在しない訳ではなく(も)とも、そういう場合が多いのだが)、また、両者の性格も背反的なものではなく、むしろ微妙にまじり合うことによって独特の魅力をもつ性格を形成しているからである。しかしながら、一方において「フール」が「陰謀家」(intriguer)であり、ましてや「誘惑者」(seducer)である例は、あるとしてもきわめて稀であるのに対して、他方「ヴィラン」は「フール」のもつ喜劇的要素や諷刺的

なユーモアを殆ど例外なく兼ねそなえて、これが彼らの魅力の一ともなっていることは注目に価する。

「フール」は、このように、「ヴィラン」のような「アウトサイダー」ではないけれども、「ヴィラン」と同じ先祖を持ち、この意味で他の人物とは異質な彼の性質が、道化の伝統と結びついて、たえず距離をおいて眺める客観的な観察者 (a detached and disinterested observer) ないし批判者としての職業的地位 (as an 'all-licensed fool' or 'a privileged man') を獲得する。この故にこそ、リアリズムの、そして喜劇の、精神が「フール」において最も自由に躍動し、ユーモラスな、時にはアイロニカルなコメントが、また諷刺が可能となるのである。この、何物にもとらわれない自由な立場を享受する「フール」は、この意味で、アウトサイダーと云えないこともない。^⑩これは職業的な道化ではないけれども、「ヴァイス」の血をその巨体にも多く引いているフォールスタッフ (Falstaff, 'that reverend Vice, that grey Iniquity'—*Henry IV*, II. iv. 500)、あるいは『冬の夜話』に出てくるオートリカス (Autolycus) が、彼らの登場する劇のヴァイタリティの大きな根源の一つと云われる理由もここにある。彼らは、両者とも、社会のアウトサイダーではないにしても、身分喪失者 (déclassés) であることに変わりはない。^⑪そして身分を失うことによって (もつともフォールスタッフは、『ヘンリ四世』第一部で逆の方向をたどり性格的に大きな変容をうけるのだが) 社会の秩序から抜け出し、その道德観にわずらわされることなく社会を批判的に見る権利を獲得するのである。このようにみると、^⑫「ヴィラン」と「フール」、あるいはそのそれぞれに類する人物が、お互いに極めて近い存在であることが納得されるであろう。(いま、フォールスタッフとオートリカスを一緒にして論じたけれども、前者は「ヴィラン」というよりは「フール」に近く、後者は——変装したり偽名を使ったりして「ヴァイス」の伝統に立つことは明らかだが——「フール」というよりは「ヴィラン」に近い^⑬)。ここで「フール」と「ヴィラン」を、一応、区別しておこう。

まず、「フール」(というのは、「wise fools」)は、第三者的な立場からする、私心をもたぬ人生批評家(a detached, disinterested and impersonal critic of contemporary life, courtly and ecclesiastical)であるのに対して、「アウトサイダー」である「ヴィラン」が「私」を離れる——‘impersonal’である——ことはあり得ない。彼らの社会に対する、また伝統的価値に対する批判は、それぞれの置かれた立場からのみなされるのであり、従って一面的たらしめるを得ないのである。

しかしながら、「ヴィラン」は、己れの置かれた立場をむしろ欣然として受け入れ、これを逆手にとって己れの利益に転ずるといふ点において、サーサイティーズ (Thersites, a deformed and scurrilous Grecian) によって代表される、いわゆる「ビタ・フール」(a railing buffoon in motley, full of turgid and muddy scurrilities) とも區別されるであろう。彼ら(特にイアゴウ)の示すシニズムも、決して否定的、消極的なものでなく、むしろそれを彼らの行動原理として取り入れる積極性の故に、世紀末以後に多くみられるベシスティックな不満居士(malcontent satirists)のそれとは類を異にする。(もともと、イアゴウには、多分に、マルコンテントの傾向がみられるが。)

さらに、健全なリアリスト(それなりに限界はあるが)である「フール」は、フランス人欲求不満の塊りのような「ビタ・フール」(Bitter fools)とは違って、その皮肉な、諷刺的なユーモアの中に、人間の弱さや愚かさを認め、そして許す、喜劇的な寛容の精神 (comical and genial tolerance of human weakness) を秘めているのに対して、不健全なリアリスト、というよりもアイディアリストと云うべき「ヴィラン」には、「フール」の示す心のやさしさや愛情、同情心といったものは一かけらもない。人間の弱さにつけ込んで、それを己れの目的のために、利益のために用いようというのが「ヴィラン」だからである。このような実利一点ばりの人物をアイディアリストと呼ぶ

ことは、奇異に感じられるかも知れない。たしかに「ヴィラン」は、恐ろしいまでの現実主義者である。しかし彼らの「現実」は、彼らの立場によって限られた視点からの現実なのである。たとえば、実利一点ばりのイアゴウは、精神的な「価値」を信ずる人間を頭から馬鹿にして、これを無視してしまう。このような（彼の目からみれば）愚かな人間の存在を目のあたりに見ながら、そしてその愚かさを自分の目的のために利用しながらも、なお、そのような人間がいるという現実——これも一つの現実である——を見ない、というより見ようとしなない。およそ現実主義者らしからぬ態度である。何故か？ それは、彼が、彼の限られた立場から、そして同様に限られた彼自身の経験から（実際、これらからのみ）、彼なりの行動原理をうち立て、個人に対する、社会に対する、いな世界全体に対する哲学を作りあげていたからである。彼の悪魔性は、キトリヂも云うように、彼の信じない原理ないし主義（Principle）を用いることにあるのではなく、彼が（経験から）信じているそれを自分の目的のために悪用することにある。^⑨ この悪用の仕方には、たしかに、恐ろしいまでに冷徹な現実主義者の目が感じられる。にもかかわらず、彼（を含めて「ヴィラン」一般）をアイディアリストと呼んだのは、たとえそのために破滅するとも、己れの主義にあくまで忠実な、彼の一面性の故なのである。

最後に、「ヴィラン」の判断と行動を支える原理は、経験による、近代的な合理主義であった。「フル」の判断の原理も（たとえそれが近代ブルジョワジーの健全な常識の域を出ないとしても）、やはり同じであると云えるであろう。ただ、「フル」の場合、行動は必ずしもそれに伴わないということである。『リア』のフルがその一番よい例だし、タッチストウンにしてもフェスティにしても、プロットの必要に応じて、どこにでも顔を出し、どのようにでも行動する。フェスティも云うように、

Foolery, sir, does walk about the orb like the sun, it shines every where.

(*Twelfth Night*, III. i. 43-4)

なのである。もっとも、この点に関しては、「ヴァイス」についても同じことが云える。たとえば、アンビデクスタが、

Now with King Cambises, and by-and-by gone, —

Thus doo I run this way and that way.

For [a] while I meane with a souldier to be,

Then give I a leape to Sisannes the judge, —

I dare avouch you shall his destruction see!

To all kinde of estates I meane for to trudge.

(*Cambises*, II. 152-9)

と云うように、「ヴァイス」は、理由もなく（人間界に悪が存在するという事実だけで十分である）、どこへでも姿を現わして秩序や人間的価値を破壊しては、新しい犠牲者を求めて、いずこへともなく飄然と姿を消すのである。しかしシェイクスピアの「ヴィラン」は（エアロンには多分にその傾向が残っているのだが）アンビデクスタのような行動は許されず、また、最後には人間界の掟による罰をまぬかれない。「ヴァイス」の「同化」の、「人間化」の、程度を示すものと云えよう。

それはともかく、「フル」はその近代的合理主義で人間の愚かさを指摘し、『リア』のフルにいたっては、老王を救おうとさえする。「ヴィラン」は、その同じ原理を、己れのために用いるのである。かくしてわれわれは、「ヴィラン」の第三の、そして最後の条件に達する。つまり「ヴィラン」は、

(3) 「悪」を公然と己れの行動原理として取り入れ、これに従って悪をなすということである。この条件がなければ「ヴィラン」はヴィラン（悪党）にならない。そしてシェイクスピアの「ヴィラン」の場合、これは、彼らが社会から疎外された「アウトサイダー」であるという事実起因する。しかしながら、「アウトサイダー」必ずしも悪を行わず、「ヴァイス」の伝統をひくもの、また必ずしも悪をなすとは限らない。また、悪を行うもの、必ずしも悪を己れの行動原理とするわけではなく、また第一、第二の条件を満たすとも限らない。こうしてみると、三つの条件を完全に満たす正銘の「ヴィラン」——先ず (1) エリザベス朝社会の「アウトサイダー」であると同時に、(2) 「ヴァイス」の伝統に立つ異質の存在として劇の世界の「アウトサイダー」でもあり、(3) して悪を己れの行動原理として悪事をなすという人物——は、随分限られてくる。私が、ここで、シェイクスピアの「ヴィラン」といふとき、それはエアロン (Aaron, a Moor) リチャード (Duke of Gloucester, afterwards King Richard III) エドマンド (Edmund, a bastard) としてイーノウ (Iago, 'a Villaine' (F)) の四人のことなのである。

この四人が、それぞれの程度に「ヴァイス」の血をひき、そして悪事をなすということには異論はないであろう。ただ、彼らの疎外のされ方に微妙な差があり、彼らの取り入れる悪の原理もそれに従って変ってくる。これらの点は、いずれ、それぞれを扱う章において、精しく検討することにして、ここでは、さしあたり図式的にその特徴を述べるならば——

エアロンは、生まれ（ムーア人であること）によって、(1) 先ず「人生」(Life) から疎外され（彼のタマラとの関係は、多分にメタフォリカルである）、(2) 次いでエリザベス朝的な劇の社会の「秩序」からも疎外されて、タイタスによって象徴されるローマの秩序を破壊する悪の要素（「ヴァイス」）として行動する。

リチャードは、歴史的必要 (Necessity) から、(1) 先ず「テューダ王朝の神話」によってエリザベス朝の「秩序」

から疎外され、(2)「怪物」(physical chaos)に仕立てられることによって「人生」からも疎外されて(Why, love forswore me in my mother's womb'—3 *Henry VI*, III. ii. 153)王冠によって象徴される権力の獲得を、疎外された自己の、自己実現の手段とする。このとき彼が用いるのは(他の「ウィラン」にも共通することだが)、「ヴァイス」の「イントリグ」および英国版マキャヴェリズムである。

エドモンドは、生まれ(庶子であること)によって「社会」から疎外されているが、その若さと美貌(the issue of it being so proper'—I. i. 17-8; my italics)が彼を「人生」からの疎外から救っている(Yet Edmund was beloved:—V. iii. 239)。(同じこととは、若くて美しいユダヤ娘ジェシカについても云える。)ただ、彼の存在そのものが「悪」(色欲、つまりエドモンドの云う「自然」——本能的衝動、我欲)の産物であるが故に、彼の人生観はこのような「自然」観によって規定(限定)され、彼もこの「自然」に従って行動しようと云うのである。

これに対して、イアーゴウは、このような「自然」を軽蔑し、これを抑え、矯正する強い「意志」(the power and corrigible authority of this lies in our wills'—I. iii. 329-30)「理性」(reason set against 'sensuality'—*ibid.*, II. 330-37)など「頭」(We work by wit, and not by witchcraft'—II. iii. 378)を信奉する。エドモンドも

Let me, if not by birth, have lands by wit: (Lear, I. ii. 199)

と云うけれども、彼の場合、「頭」は目的のための手段にすぎない。イアーゴウにあっては、それは手段であると同時に目的そのものである。彼の全存在を支えるもの、いわば彼の存在証明なのである。彼は「ウィット」を用いて「ウィット」の正当性を主張するのにやっきになっているようにみえる。イアーゴウの疎外は、従って、前三者にみられるような外面的な原因によるのではなく、彼自身の、このような態度に発するのである。イアーゴウの示すいらだたしさは、彼と価値観を異にする人物に対するいらだたしさであり、そのような、彼の目

には間抜けとしか映らぬ人物が世に重用されて、自分の眞の価値は認められないという現実に対するいらだたしさであると云えるであらう。彼は、ただ、「大胆なイアーゴウ」(the bold Iago, II. i. 75)として、また思ったことをそのまますけずけ云う正直者(an honest, blunt fellow)としてのみ認められ、その限りにおいて珍重されているにすぎない。彼もその役柄を受け入れて(For I am nothing, if not critical. II. i. 120)見事に演じはするけれども、彼が軽蔑するキャシオウから、

He speaks home, madam; you may relish him more in the soldier than in the scholar.

(II. i. 166-8)

と、とりなすように云われて、いい気のしよう筈がない。大体が、キャシオウは、イアーゴウに対していつも身分の違いを思い出させるような言葉を口にする。これもイアーゴウにとって氣にくわぬことであつたらう。しかも、このような不満のそもその原因がオセロウにあるのだから、目の前に見せつけられる新婚の彼の幸福そうな姿も、しゃくの種であつたに違いない。どちらを向いてもイアーゴウの目にふれるものはすべて怨恨(grudge)の種ばかりであつた。このような彼の不満が彼を社会から疎外し、(いわば自己の存在証明のための)悪事へと駆りたてるのである。^⑧

「ヴァイス」の人氣がその喜劇性、冷笑的ユーモアにあつたことは周知の通りだが、しかし彼が「悪徳」(の視覚化、舞台化)であることに変りはない。「ヴァイス」は、「フール」をも演じる。しかしそれは、ただ、悪の施行者という本来の役柄の範囲内においてのみなのである。「ヴァイス」がコミックなのは、悪を行う手口にあるのであつて、その結果は容易ならぬものを含みうる。喜劇になるか悲劇になるかは、一に結果の深刻さ如何に

かかっているのである。シェイクスピアの「ヴィラン」の場合は、この関係が逆になると云えるであろう。彼らが悲劇の世界におかれるか喜劇の世界におかれるかで、彼らの性格が、そして彼らの行う悪が、微妙な変容を受けるのである。あるいは完全な「ヴィラン」になったかも知れぬシャイロック (Shylock, a rich Jew) やドン・ジーン (Don John, a bastard) が、いわば準「ヴィラン」——他の条件はすべて備えているが、悪行にかけては十分——たるに止まるのも、彼らが喜劇の世界の人物だからであろう。かくして、「ヴェニス商人」アントウニオウに対するシャイロックの烈しい憎悪も、復讐も、ロマンティック・コメディにふさわしいポーシアの趣向によって挫折し、明らかにイアーゴウ・タイプの悪党 (Cf. *Much Ado*, II. iii.) であるドン・ジーン (the bastard, whose spirits toil in frame of villanies' — IV. i. 190-91) の悪巧みも、大事にいたらず、結局『むだ騒ぎ』に終るのである。この言葉数の少ない (I. i. 158-9) 'ゆううつ病の不滿居士 (melancholic malcontent; cf. I. iii. 40-41, II. i. 6) の性格が、イアーゴウに発展する芽を含みながらも十分に展開されておらず、これと対照的に、快活で才気煥発のビートルス (Beatrice) とベニディック (Benedick) が生き生きと描かれているのも、すべて、これが喜劇であるという理由によると思われる。

〔註〕

- ① *Sir Clyomon and Sir Clamydes*, I. 213 (quoted by Bernard Spivack, *Shakespeare and the Allegory of Evil*, Columbia University Press, 1958, p. 128). Cf. also *New Custom* (quoted, *ibid.*, p. 127):

Remember also, that it were a great shame

For thee to have forgotten thy own name.

Perverse Doctrine, of right, must the truth so pervert

That he never let it sink into any man's heart.

(Doddsley, III, 28; my italics)

② 特にならわらない限り、シェイクスピアからの引用は、すべて、シロウン版による。

③ 「マローウの主人公とシェイクスピアの『ヴィラン』」について、また別の機会に語らねばならぬ。

④ 『人文』第七集（京都大学教養部）、一六五頁参照。

⑤ Cf. Friedrich Nietzsche, *The Birth of Tragedy* (Doubleday Anchor Books), p. 10: 'It is here that one could find—perhaps for the first time in history—a pessimism situated “beyond good and evil”;... a philosophy which dared place ethics among the phenomena (and so “denote” it)—or, rather, place it not even among the phenomena in the idealistic sense but among the “deceptions.” Morality, on this view, became a mere fabrication for purposes of gulling: at best, an artistic fiction; at worst, an outrageous imposture.'

⑥ Cf. Hiram Haydn, *The Counter-Renaissance*, Charles Scribner's Sons, N. Y., 1950, Chapter 5.

⑦ *Romans*, XII, 4, 5 and 1 *Corinthians*, XII, 26: 'For as we have many members in one body, and all members have not the same offices: So we, being many, are one body in Christ, and every one members one of another.... And whether one member suffer, all the members suffer with it; or one member be honoured, all the members rejoice with it. Cf. also *Henry* V, I. ii. 180-87, 204-13; etc.

⑧ Cf. *Coriolanus*, I. i. 99-158.

⑨ *Of the Latius of Ecclesiastical Politic*; *Works*, I, 208 (quoted by Kenneth Myrick, 'Christian Pessimism in *King Lear*' in *Shakespeare 1564-1964*, ed. by Edward A. Bloom, Brown University Press, 1964, p. 64).

⑩ この意味で、チョーサ描くジョウのピスのおかみは立派な近代精神の持ち主と云えるであろう。ただし、チョーサが、オヴィディウスなどの権威によらせず、自己の（豊富な）経験から堂々と語らせることができたのも、これを語る人物が

高位の人物ではなく、笑って済ませる(喜劇的な)庶民(おかみ)であつたからであり(第一、学がなければ引用のしやうもない)。あゝ、とぞ、‘though noon auctrice/ Were in this world’ ありとあるだけの「世」は与えられてゐる。あだそふハジミツは天下國家の大問題ではなべ、幾じひつひあゝたからひあひつ。

⑫ *The Works of Thomas Kyd*, ed. by Frederick S. Boas, Oxford at the Clarendon Press, 1955.

⑬ シヤインズの云々「自然」とぞ、ニビヤあひあひ、先に引用したフニカの「自然」とは全く反対の概念(‘natural impulse, as opposed to the traditions and customs of society’—Glossary to *The New Shakespeare Edition of King Lear*, ed. by G. I. Duthie and J. D. Wilson. Cf. also *ibid.*, pp. xlii-vii.) 予、あだそふハキーニキミツの「自然」(2 *Henry IV*, III. ii. 356-9) 云々。Cf. Fulke Greville, *An Inquisition upon Fame and Honour*, st. 12 (quoted by Haydn, *op. cit.*, p. 386):

Humours are mans religion, Power his lawes,

His Wit confusion, and his Will the cause.

⑭ M. C. Bradbrook, *Shakespeare and the Elizabethan Poetry*, Chatto and Windus, 1951, p. 100.

⑮ Cf. Prologue (by *Machewil* himself) to *The Jew of Malta*, II. 7-27, esp. II. 14-5 (*The Works of Christopher Marlowe*, ed. by C. F. Tucker Brooke, Oxford at the Clarendon Press, 1953 (19107)):

I count Religion but a childish Toy,

And hold there is no sinne but Ignorance.

Cf. also *Sejanus, his Fall*, II. ii, (*The Works of Ben Jonson*, ed. by Francis Cunningham, John Camden Hotten, London, Volume I, p. 288):

‘Twas only fear first in the world made gods.

and *ibid.*, V. i. (pp. 315-6):

What excellent fools

Religion makes of men! ...

I know not that one deity, but Fortune,

To whom I would throw up, in begging smoke,

One grain of incense; or whose ear I'd buy

With thus much oil.

㊤ Cf. Henry Cornelius von Nettesheim Agrippa, *Of the Vanitie and Uncertaintie of Artes & Sciences*, sig. Ss4v (quoted by Haydn, *op. cit.*, p. 146): 'Finally the Lawe of Nature is that wee shoulde not dye for thirste, for hunger, for colde, and not to hurt our selves with watchinges, and laboure. Whiche abandoning all the repentaunce of Religion, and the workes of repentaunce, dothe appointe the pleasure of the *Epicure* for the chiefest felicitie.'

㊦ Cf. Haydn, *op. cit.*, p. 567: '... the high (or low) point of cynicism (in Aretino's *La Cortigiana*, the most scurrilous and cynical of all the satires on Castiglione's ideal society) is not reached until Parabolano "makes peace all around" in Act V. Several of his injunctions to the other characters are *distortions of some phase of the Law of Nature*, or *distinctly personal applications of the "follow your bent" philosophy*. Thus he himself pardons Alvingia, the brothel keeper, *because she was only following her profession!* ... And (shades of Machiavelli!) the fisherman must be contented with having been swindled, since he had shown himself so little of a Florentine in permitting himself to be duped.' (My italics)

㊧ Quoted by Haydn, *ibid*, p. 304.

㊨ 特洛伊のトロイアス王ヘクトールとギリシャ軍のトロイアス王ヘクトールの戦い (Troilus and Cressida, I. iii. 81-3)°

㊩ Cf. Charles Mitchell, 'Henry V: The Essential King' in *Shakespearean Essays*, ed. by Alwin Thaler and Norman

Sanders, *The University of Tennessee Press*, 1964, p. 98: "At the beginning of the play divine providence is more like a means to an end, Henry's personal victory; at the close, Henry views his personal victory as a means of implementing a higher end, God's providence." ヘンリが最後に悟るにいたる（人間の「手だて」を越えた）神の摂理は、『ハムレット』（V. ii. 10-11）において最後の表現を与えられている。

②① この点については、ハズタドおよびフォールスタフとの関連において、後に述べる。

②② 王は、「王」であるだけでは十分ではない。形式（王権）は、それにふさわしい内容（人間）によって充塞されねばならなかった。王は、人間としても、普通の人間と同じ、いま一人の人間であってはならないのである。王の理想と現実の矛盾に直面して、王も一介の人間にすぎないとしたりリチャード二世は、その故に伝統も儀式も単なる空しい「形式」として否定する他なかった——

... throw away respect,

Tradition, form and ceremonious duty,

For you have but mistook me all this while:

I live with bread like you, feel want,

Taste grief, need friends: subjected thus,

How can you say to me, I am a king?

(*Richard II*, III. ii. 172-7; my italics)

しかしながら、これでは問題の解決にはならない。このような心的態度では、自分の弱さを隠す楯として王権の神聖という伝統的な権威を絶対的に主張するか、それとも全面的に否定するかのいずれかだからである。一度はヘンリ五世も、王の権威は「おうれの夢」（'proud dream' — IV. i. 274）にちなむと退ける——

What infinite heart-ease

Must kings neglect, that private men enjoy!

And what have kings, that privates have not too,

Save ceremony, save general ceremony?

And what art thou, thou idol ceremony?

.....

Art thou aught else but place, degree and form,

Creating awe and fear in other men?

(*Henry V*, IV. i. 253-66; my italics)

そして、

... O, be sick, great greatness,

And bid thy ceremony give thee cure!

(*Ibid.*, II. 268-9)

以下の数行は、フォールスタッフの「名譽問答」を思わせるものがある。

しかしながら、この空ろな形式（‘ceremony’, i. e., the outward forms of state——これを ‘place, degree and form’ にすぎないと云っているヘンリーの口振りは注目に価する）に内容を与えて充実させるのも王のつとめなら、また臣下に対して王の「威風」を示し（*Cf. ibid.*, II. 113-4）、外面的な「地位、位階、格式」を保つのも、王のまぬかれぬ義務でもあった。これを無視すれば、身をやつしたヘンリーが身をもって悟ったように、「無秩序」や混乱はさけられないのである——

Your majesty came *not like yourself*: you *appeared* to me but as a common man; witness the night, your garments, your lowliness; and what your highness suffered under that shape, I beseech you *take it for your own fault* and not mine: ...

(*Ibid.*, IV. viii. 53-8; my italics)

たしかに、フランス皇太子の挑戦をうけて立ったときのヘンリー五世の戦争に対する態度は、私利私欲に、そして外面的シェイクスピアの「ヴィラン」

な「威厳」(あるいは体面)にかかわったものであったろう。戦いは、ヘンリにとって、政策の具として必要であり、また積極的な善と思われたかも知れない。しかし政策の手段としてではなく、一つの経験として眺められたとき、戦いは、ぞっとするような恐ろしい現実であった。愕然とした彼は、私利をすて、より広い責任感に目覚めるのである。ヘンリ五世を一変させたのは、アジンコートの戦いの前夜に、下々の兵士との会話を通して悟ったこの厳肅な現実であった。ミッテエルも云うように、「政策としての戦いは、ヘンリを法的に王とする。恐るべき現実としての戦いは、彼を倫理的に王とする」(Charles Mitchell, *op. cit.*, p. 99)のである。

王の「威風」(ceremony)も、王と臣下を区別する単なる外面的な要素にとどまる限り、空しい「言葉」にすぎない。一皮はげば、王も臣下と同じ人間である。しかし、全く同じではない。重責をせおっているだけに、臣下よりはるかにつらい立場(O hard condition, *Twin-born with greatness*, —IV. i. 250-1)にあるからである。これを自覚したとき、つまり王は一国の長であると同時に、国の福祉につかえる下僕でもあると悟って、これを積極的にうけ入れるとき、王権は、そして王の「威風」も、新たな意味を帯びてくる。王のつらさをただ歎くことも、また下々の気楽な身分をただ羨むことも、なくなるであろう。ヘンリ五世が、近代的な君主として王権を主張するのは、まさにこのような意味においてであり、彼がアジンコートの戦いに先立ってとく社会的ヒエラルキーも、倫理的ヒエラルキーの反映、つまり無私の勇氣(valour)によって示される内的善の「位階」(degree)なのである——

For he today that sheds his blood with me

Shall be my brother; be he ne'er so vile,

This day shall *gentle* his conditions...

(IV. ii. 61-3; my italics)

(これは、しかし、ヘンリの単なるデエスチャにすぎないのであるか？ フランスの貴族モンジョイの語る中世封建的な言葉—IV. vii. 77-81—と比較せよ。)

②③ この点については、後に、クリナとの関係において、いさしくわしく述べる。

- ⑩ Cf. L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes*, Chatto & Windus, 1959, p. 75: '... honour (here) means standing up for your own valuations.'
- ⑪ 'A mode of judgment based entirely on the subjective ground of passion and will' (Knights, *ibid.*, pp. 75-6).
- Cf. *Troilus and Cressida*, II. ii. 52-60.
- ⑫ Cf. the insubordination — *individualism* in a subordinate — of Achilles who 'has grown very particular about his own *individual* merits and about his own *individual* value to the Greek host' and 'is not content to execute his own functions under the commander-in-chief' (G. I. Duthie, *Shakespeare*, Hutchinson's University Library, 1955, p. 101); the 'illegitimate *individualism*' of Paris who 'for his own gratification ... is prepared to pull down the whole city' (*ibid.*, p. 104); the 'irrational *individualism*' of Hector, 'a self-deceiver' whose 'self-deception involves him in betraying his people and city' (*ibid.*, p. 108). (My italics)
- ⑬ John Donne: *The Anniversaries*, ed. by Frank Manley, The Johns Hopkins Press, 1963. Cf. *ibid.*, p. 144: 'Other than Donne no one presents more clearly the impact of scientific rationalism on the Medieval world picture.' For 'a sensible decay of the world', see C. M. Coffin, *John Donne and the New Philosophy*, (New York, 1938), pp. 20, 21, 264; and also William Empson, *The Structure of Complex Words*, Chatto and Windus, 1952, p. 151. Cf. also Coriolanus, who has exiled himself from Rome:

... But, *out, affection!*

All bond and privilege of nature, break!

Let it be virtuous to be obstinate.

... I'll never

Be such a gosling to obey instinct, but stand,

As if a man were author of himself

And knew no other kin. (*Coriolanus*, V. iii. 24-6, 34-7; my italics)

⁽²⁷⁾ See Kenneth Myrick, *op. cit.*, p. 62.

⁽²⁸⁾ See *ibid.*, p. 63. Cf. also J. H. Walter's note to his edition of *Henry V* (The Arden Shakespeare), I. ii. 67-9.

⁽²⁹⁾ See J. D. Wilson's note to his (and Q's) edition of the play (The New Shakespeare), II. iii. 1-2.

⁽³⁰⁾ バトラー (Samuel Butler) が『エリウオン』(Erewhon)の医者の口を通じて諷刺しているのも、まさにこの点である。

⁽³¹⁾ ただ、ハムレットにとって皮肉なのは、「思いも及ばぬこと」が、超自然的な亡霊の出現ではなしに(これはそのまま受け入れる用意がハムレットにはあった)、その出現の原因となったデンマークの、「見かけ」の秩序の背後にひそむ腐敗した「現実」の悪であったことである。これがハムレットを狂気に、メラニコリに、シニシズムに、その他(深層心理学者を除く)批評家によって考え出されたあらゆる症状に追い込むのである。

⁽³²⁾ ただ、エドモンドだけは、後悔はしないけれども(そしてエファロンを思わせるセリフ——

What you have charged me with, that have I done;

And more, much more; (V. iii. 162-3; my italics)

——を語り、死にのぞんでも二人の女にもてたことをぬけぬけと語る——

Yet Edmund was beloved: (*Ibid.*, I. 239)

——けれども)しかし、父の最期を語るエドガの言葉に「心を動かされた」(V. iii. 199)と云う、「本性にそむいて」(*Ibid.*, I. 243)善をなさうという。死にのぞんで示すエドモンドの、この唐突で不自然な変化は、しかしながら、彼の破壊の原因が、むしろリチャードのそれに似て、多分に外面的なものである(エドモンドあてのゴナリルからの密書がオーレル・パニ公の手に渡り、その正邪を決する(きわめて儀式的な)正式の決闘において、いわば神の正義の行使者とも云うべき

エドガの刃にかかって倒れる」ということと共に、『リア王』の悲劇全体としての構成およびモラルとの関係において考察するべきものである。逆に云えば、エドマンドの、このとってつけたような変化とその空しい善行は、彼の悪が（エアロンやイアーゴウの場合と違って）、リチャードのそれと同様、劇の枠内で罰せられるという事実とともに、この人物および劇全体の性格に対する一つの指標といえるであろう。

③ このそれぞれについては、また後にふれる。

④ 勿論、ハムレットは、正銘の「ヴィラン」のように、エゴイストでも唯物主義者でも、又すべてを自分の目的のために用いる実利主義者でもない。また、彼の真理の探究や発言は、当時のコンヴェンションに従って、「佯狂」（antic disposition—*Hamlet*, I. v. 172）という隠れ蓑の下から行われていることも見逃がせない。気違いや生来の白痴（natural）は、神の言葉——真理——を語るものとして尊重され、また如何なる発言も許されていたからである。シェイクスピアの道化（“all-licensed fool”—*Lear*, I. iv. 220; “a privileged man”—*Troilus and Cressida*, II. iii. 61）もこの伝統の上に立つ（*Cf. End Welford, The Fool*, Anchor Books, 1961 [1935]）。

しかしながら、先にふれたように、狂気そのものも、社会からの疎外の一つのあらわれと見ることができであろう。「健全なる常識人」とは、いかなる社会にも適応できる人物の謂いであり、また社会はそれを要求する。このような人物は社会の背後にひそむ（悪の）現実を見抜けないか、あるいは見抜いても口にすることをはばかる（だけの）「常識」がある。気違いは、社会に適応できず、社会から疎外されている故に、「見かけ」の因習にまどわされることなく、その背後にひそむ「現実」を見抜き、それを大胆に表現することができるのであろう。逆に云えば、社会は、このような人物を気違い扱いにすることによって身の保全をはかると云えるかも知れない。これを逆手にとって、道化は、そしてハムレットも気違いをよそおうことにより、「見かけ」の社会の外に立ちこれを批判し諷刺する自由を得るのである。これが狂気の、そして道化のコンヴェンションを支える現実であると思われる。

⑤ 「ヴァイス」について語るところは当面の目的ではない。ここでは、スピヴァック（Bernard Spivack, *Shakespeare and*

the Allegory of Evil, 1958) に於ては、本論に關係があると思われる部分について簡単に示されるに止まる。

② *I. e.*, a conflict of the soul with the body. *Cf. Romeo and Juliet*, II. iii. 27-8:

Two such opposed kings encamp them still

In man ..., grace and rude will.

③ 'In its subjective Elizabethan sense *conditions*, or its more usual singular form, signifies the moral constitution of a man, what today we should call his disposition or character; and *common conditions* expresses a mixed disposition, inclined both to good and ill. His real name, he explains in his long initial monologue, is Mediocritry, which amounts to the same thing. Woven into the story as the agent of its vicissitudes, he also equates himself with the caprice of fortune ...' (Spirack, *op. cit.*, p. 295).

④ たとえ「肉欲」を以て「ヴァニース」が「人間にとり入る(て仲間になつ)たとすれば、人間は文字通り色欲のこり」になつたことを意味する。ハジビエモンとタペラの關係を想起するのも場違ひではない。「曲解主義」(Perverse Doctrine)の「犠牲者としての道德的影響」について、註①の引用を参照。

⑤ Spirack, *op. cit.*, p. 176.

⑥ *Ibid.* 參見あひて「ヴァニース」の主な手段を左に列挙する——

1) his dissimulation in the form of moral disguise:

“All *Vices* maske themselves with the vizards of *Vertue*” (p. 155, *ibid.*).

2) his physical disguise, a grosser form of duplicity:

“I have a garment correspondent to that name” (p. 161, *ibid.*).

3) his virtuosity in the art of false faces:

“Two faces in a hode couerly I bere,” one being of ‘gravee’ (*ibid.*).

4) his trick of tears and laughter :

“ I can dyssemble, I can bothe laughe and grone ” (p. 162, *ibid.*).

5) his honesty : ‘ He forever dissembles himself as an honest man, is forever taken as such by his dupes, and forever shares the jest with his audience ’ (p. 164, *ibid.*).

6) his sneering, witty aside (which is sometimes long enough for the ironic gloss that fulfils his homiletic duty to the audience) :

“ A ha ! syrs, let the cattie wyneke ! ”

For all ye wote not what I thinke, ... ” (p. 167, *ibid.*).

7) his oral legerdemain : his ‘ truth-revealing jest ’ to his victim (see p. 168, *ibid.*).

8) his deadly talent for moral sophistry (pp. 170, 176, etc., *ibid.*).

⑤ See Alfred Harbage, ‘ Intrigue in Elizabethan Tragedy,’ in *Essays on Shakespeare and Elizabethan Drama*, ed. by Richard Hosley, Routledge & Kegan Paul, 1963.

⑥ Quoted by Spivack, *op. cit.*, p. 202.

⑦ ハリボウは「癡」(fool) ヲモフ「廣い癡」(broad clowning) 笑聲を込めたタートン(Richard Tarlton)の滑稽な表現(William Kempe, ‘Jestmonger and Vice-gerent general to the Ghost of Dick Tarlton’ — *An Almond for a Parrot* by Nashe?) の笑ひた表現を「特等」(a clown, or rustic ; like Peter in *Romeo and Juliet* and Dogberry in *Much Ado About Nothing*) にちなんで「ローミン」(Robert Armin) の参加を促した俳優の道化の新生面を開いた後期の道化(タチタストウン・フォスティ・センプ『リン』のローミン——See Leslie Hotson, *Shakespeare’s Molley*, Rupert Hart-Davis, 1952, pp. 85-8) の笑ひた表現を「特等」(Robert Hillis Goldsmith, *Wise Fools in Shakespeare*, Liverpool University Press, 1958, p. 31) にちなんで。Cf. also Empson, *op. cit.*, pp. 114-5.

- (44) トウパズ師に扮して「ヴァイス」に伝統的な「説教」(のバロディ)を行う以外、マルヴォウリオウ瞞着の座興にも、フェスティは直接参加しない。 Cf. Goldsmith, *op. cit.*, p. 31.

- (45) 'That villainous abominable misleader of youth' (1 *Henry IV*, II. iv. 508-9) と呼ばれるフォールスタフは、勿論、職業的な「道化」ではな^らず。

- (46) 註(24)参照。

- (47) Cf. Welsford, *op. cit.*, pp. 233, 250, 323, etc.; and also Empson, *op. cit.*, pp. 112-3.

- (48) Cf. *The Winter's Tale*, IV. iii. 91-107. 上層社会 (the underworld) の王者「フォールスタフにうつつは」後に述べる^{こと}。

- (49) 「登場人物」表は「オートリカスを「a rogue」と規定してゐるが、これは「ただ単なる「浮浪人」(Cf. 'having flown over many knavish professions, he settled only in rogue' — *The Winter's Tale*, IV. iii. 105-7) であつただけでな^らず^{こと}。

- (50) See G. L. Kittredge's note to his edition of *Othello*, (Ginn and Company, 1941), III. iii. 237-8.

- (51) Cf., however, Cornwall on Kent:

This is some fellow,

Who, having been praised for bluntness, doth affect

A saucy roughness, and constrains the garb

Quite from his nature: he cannot flatter, he,

An honest mind and plain, he must speak truth!

An they will take it, so; if not, he's plain.

These kind of knaves I know, which in this plainness

Harbour more craft and more corrupter ends

Than twenty silly ducking observants

That stretch their duties nicely.

(*Lear*, II. ii. 101-10; my italics)

⑤2 後にくわしく述べるが、『オセロウ』はあくまで主人公オセロウの悲劇であって、イアーゴウを中心に見ることは勿論、イアーゴウの「瞞着」そのものも、それだけとり出して考察するべきではない。これはあくまでオセロウの生涯に起った一つの事件 (Incident)——致命的な事件ではあったが——として考えらるべき性質のものである。一体、人は幸福であるとき、その幸福がいつまでも続くようにと願う。ということは、とりもなおさず、幸福はいつまでも続かないということをして——たとえその原因がその人自身に発するものであれ、他人の、あるいは、天、運命の嫉み、または「時」そのものの破壊作用といった、外部からの原因によるものであれ、「幸福の後にくるもの」とは不幸に他ならないということをして——人は本能的に恐れているということである。これがいろんな俗習となって定着していることは周知の事実であろう。豊作の祝いに舟を入江に浮べながら、舷をたたいて不作だと天に向かって叫ぶとか(『スージ・ウォンの世界』)、幸運にめぐまれた時わざとみじめを装う俗習も、あるいは道化(不具または白痴といった発生的段階における)を常に傍らにおいてこれに悪態をつかせることにより厄をのがれようとする古代からの風習も (Cf. Welsford, *op. cit.*, esp. Chap. III: 'The Fool as Mascot and Scapegoat'; and also Empson, *op. cit.*, p. 115.)、すべて、天や運命、あるいは他人の嫉みを恐れ、それから自己を(己れの幸福を)まもうとうとする気持のあらわれである。逆に云えば、イアーゴウのような悪の存在理由は、われわれの心にひそむ、このような恐れ of 気持の中にあると云えるであらう。

この恐れ of 気持はいわれのないものではないが、何よりも、自分は仕合わせだと思うその人自身の意識に発する。従って、オセロウがキプロスでデズディモウナと再会して、

If it were now to die,

シェイクスピアの "ヴィラン"

シェイクスピアの「ヴィラン」

五二

"I were now to be most happy; for, I fear,

My soul hath her content so absolute

That not another comfort like to this

Succeeds in unknown fate. (II. i. 191-5; my italics)

と叫ぶ彼の言葉そのものの中に、イアーゴウの存在とその悪に對する十分な「心理的」説明があると云えるであらう。オセロウに、そして觀衆に、このような恐れが存在する限り、イアーゴウの悪に特別の説明はいらない。そして、この恐れを実現させさえすれば、イアーゴウの機能は終るのである。この意味で、イアーゴウは、オセロウの、そして觀衆の心理において完全となるのであって、彼自体としては決して「ラウンド」な性格ではない。ここにイアーゴウの性格の問題があるともいえるであらう。

しかしながら、「ヴィラン」は所詮「ヴァイス」ではない。人間的調和・価値の破壊者としての彼の機能のゆるす限りにおいて、イアーゴウの「人間化」「内面化」「動機づけ」は、「劇的」に、必要であった。シェイクスピアのイアーゴウの性格創造は、この方向にむかうのであり、「ヴィラン」を考察の対象とするわれわれの関心も、この点に向けられることになる。